

アマゾン像の変遷について

根本英世

I

アマゾンたちについては古来さまざまな伝承があるが、そこにはかなり古い時代に遡るもの、或いは明らかに後代に付加されたと思われるものなど、幾つかの層が見られる。比較的古い層に属すアマゾン伝承としては、以下のものが挙げられよう：

1. リュキア侵攻、ベレロポンテスによる撃退⁽¹⁾。
2. プリュギア侵攻、プリアモスたちの援軍による撃退⁽²⁾。
3. ヘラクレスがテルモドンに行き、女王の帯を略取⁽³⁾。
4. テセウスによる女王掠奪およびその報復としてのアテナイ攻め⁽⁴⁾。
5. トロイア戦争におけるトロイアへの援軍⁽⁵⁾。

アマゾン女族に関する最初期の言及例はホメロスに見られる。II.第Ⅲ歌、いわゆるTeichoskopiaの件で、ギリシア軍を眼前にしたプリアモスはヘレネを相手に、自身が昔日プリュギアへ援軍に赴いた折を回顧して、以下のように語る：

試訳「というのは私もその日は彼らの助太刀のひとりに数えられていたのだ、

antianeiraiアマゾンたちが攻めてきたときのことだが。」3.188-9

また同じくII.第Ⅵ歌ではリュキアにおけるベレロポンテスの第3番目の功業が、こう語られる：

試訳「彼はさらにantianeiraiアマゾンたちを殺戮した。」6.186

以上の2例でホメロスは、彼女たちがプリアモス或いはベレロポンテスという英雄を相手に闘ったことを伝えるのみで、彼女たちの系譜、社会、風俗に関しては沈黙している。ではこれ以上を詩人の作品から知ることはいかなるのだろうか。ここで問題となるのが、上の試訳で原語のままに残したantianeiraiなる語である。

叙事詩に頻繁に現われるエピテトン^{epitheton}は、特定の音節を埋めるという韻律上の機能を有しているが、その語が添えられた神・人物・事物の本質を、正鵠を射たイメージで表現するという働きをも、併せもつ。アマゾンたちに添えられた

antianeiraiを、一部の研究者は“男性と闘う”あるいは“男性を憎む”を意味するものと解釈する⁽⁶⁾。この解釈はたしかに後代のアマゾン像とは一致しようが、果たしてホメロスにおける用例にも当てはまるのだろうか。上に挙げた用例のコンテキストから判るのは、アマゾンたちが男たちと闘った、ということにすぎず、彼女たちがその習性として男性に対して敵対的であったり、或いは男性に対して憎悪の念をもっているとは解釈できない。またIl.3.189の古注は“antianeiraiとは男性に匹敵する、或いは男性に敵対する、の謂い”と説明しているが、さらに“アマゾンたちは弓術にかけてはantianeiraiであると言われる”とも述べているのである⁽⁷⁾。

ところでトロイア叙事詩圏でIl.に続く『アイティオピス』は、トロイアの援軍として参戦したエティオピア軍の将メムノンの活躍と死およびアキレウスの死を扱っていたが、少なくともその冒頭部は『アマゾニア』Amazoniaと称せられていた⁽⁸⁾。そこで女王ペンテシレイアと共にアマゾンたちが活躍したことは間違いない⁽⁹⁾。Il.終末部のヘクトルの死によって戦況はトロイア側に著しく不利になったが、『アイティオピス』ではそのトロイアに束の間の希望を与える援軍の奮闘が語られていたのである。つまりアマゾンたちがここでギリシア軍と闘うのは男性に対する憎悪ゆえではなく、エティオピア勢同様、トロイアを援けるためである。無論プロクロスによる梗概にも、彼女たちの反男性的習俗に関する記述は見られない。英雄叙事詩におけるアマゾンに、反男性的あるいは男性憎悪的な要素を見出すことは困難であろう。“男に伍して闘う”“英雄たちと比較しても遜色のない”戦士として描かれているのみである。むしろantianeiraiをこのように解釈してこそ、プリアモスとベレロポンテスが彼女たちを打ち負かした意義が明瞭となる⁽¹⁰⁾。つまり彼女たちに対する勝利は英雄たちの“アリスティア”を意味したものと考えてよい。

ホメロスには語られていないヘラクレスやテセウスのアマゾンたちとの関わりも、やはり彼らの“アリスティア”であろう。ヘラクレスがヘラおよびその巫女アドメテのためにアマゾンの女王の帯を取りに赴くことは、伝説の中でまさに彼の“功業”の一つとしての地位を占める。さらに“帯”には、女性の帯を指すzoneではなく、男性用、それも通常兵士が纏うzosterという語が当てられていることに留意したい⁽¹¹⁾。これはアマゾンの女王が“戦士”であり、その部族が“戦士国家”であることを意味しよう。つまり“帯”の略取とは、英雄による戦士国家征服の謂いにほかならない。このことが一層明確に示されるのが、テセウスによる女王掠奪である。

ところでII.の前述の箇所ほかに、アマゾンが言及されていると見做されているのが2.814、人間による呼称に対置される神による呼称が語られる箇所である：

試訳「(この丘を)不死なる神々は動きの敏速なるミュリネの墳墓と呼ぶ。」
このミュリネは普通アマゾンとされている。西暦後の作家たちの伝承によればたしかにそのとおりであるが⁽¹²⁾、ホメロスではこの箇所だけに言及される人物だけに、後代の資料のみによって断定することには慎重でありたい。さらに時代を遡ることはできないものだろうか。

ここでアリストパネス『リュシストラテ』Lysistrateについて考えてみたい。この作品は、戦争に明け暮れている社会に対する批判ではあるが、舞台では男性に対する女性の反乱という形を取っている。その結果として男女の闘いが描かれることになる。まずリュシストラテの台詞「戦は女の仕事」538は、直前の520で引用されたヘクトルの有名な言葉のパロディーでもあるので、観客は舞台上の女性たちの戦闘的性格を容易に了解したことであろう⁽¹³⁾。また男性のコロスが女性の侮り難さをこう語る：

試訳「女というものは実に馬術に長けたもので、しっかりと跨がるものだ、

もし馬が駆けても落ちやしない。あのアマゾンたちを试试看、

ミコンの描いた、騎上から男たちと闘う女たちを。」677-9

ここではアマゾンという言葉がはっきりと語られており、舞台上の女性たちからアマゾンを連想する雰囲気醸し出されていたと思われる。さらに登場人物の一人の名前ミュッリネMyrrhine。この名前を「アテナイではごくありふれたもの」と考えるだけでは十分ではないし、まして「性的な連想を伴う」と片付けるのは見当違いではないか⁽¹⁴⁾。前5世紀後半のアテナ・ニケの巫女に同名の人物がいたようであるし⁽¹⁵⁾、またトゥキュディデス6.55.1によればヒッピアスの妻もミュッリネであった。たしかに現実存在していた名前ではある。しかしそれだけに一層、親が娘にポピュラーな名前を与えることは考えられても、露骨に性的な連想を伴う命名をするとは考えにくいではないか。ミュッリネは、言語学的には前出ミュリネMyrine(<*Myrjine)と同一と考えられる⁽¹⁶⁾。アリストパネスの狙いは、舞台に戦士集団として伝説的に誉高い“今様アマゾネス”を登場させることではなかったか。詩人の意図が成就するための条件として、前5世紀の聴衆たちにとって、ミュリネの名前からアマゾンを連想することは可能であったと考えられるのである。

ストラボン等の記述、またアイオリスの同名の都市の存在に加えて⁽¹⁷⁾、さ

らに上の古典期の一例の考察から判断して、II.のミュリネをアマゾンと見て、ほぼ間違いないであろう。そして我々が知る限りの比較的古いアマゾン伝説では、彼女たちは、英雄の“アリスティア”を強調する色彩を帯びていたことが確認できた。つまりプリアモスもベレロポンテスも、さらにヘラクレスに続いてテセウスも“アマゾノマキア”を経ることによって、その経歴をより輝かしいものとしたのである⁽¹⁸⁾。これらのアマゾンたちには本来反男性的な要素は見られない。

では反男性的、男性憎悪的アマゾン像が確立してくるのはいつ頃のことだろうか。古代におけるアマゾン像とは具体的にはどんなものなのかを検討した上で、以下にこの問題を考えたい。

II

ヘロドトスがIV110.1でサウロマタイ人に関して伝えるところでは、この部族の先祖はアマゾンたちとスキュタイの若者たちである。彼女たちは奪った馬を駆って、スキュタイ人の財を掠奪していた。そこでスキュタイ人は彼女たちから子孫を得たいと思い、若者を派遣するが、彼らは彼女たちに籠絡されてしまう。快適な生活を餌にして、求婚する青年たちに対して、彼女たちは思慮深く断る。さらに、彼らが自分たちと結婚したいのなら、親から財産を分けて貰ってくるように、そしてタナイス河の彼岸にともに移り住もうではないか、と提案する。事態は彼女たちの望んだとおりに推移するわけである(114.2f.)。このエピソード全体は、若い男女が因習的社会から離れて新天地を求めるという結果と共に、お伽話的な雰囲気にも包まれている。ここには“反男性的なアマゾン”は描かれていない。むしろ、異言語修得の際に示した才能にも窺われるように(114.1)、その生活は非文明的ではあっても、彼女たちの知的卓越性が強調されているように思われる⁽¹⁹⁾。

しかしこのエピソードでさらに重要なのは、彼女たちの生活様式である。それはスキュタイの青年の誘いに対する答えに現われている：自分たちはスキュタイの女性たちと生活をともにすることはできないだろう、彼女たちとは習慣が違うのだ、すなわち自分たちは槍・弓の術も馬術も心得ているが、女の仕事を習いはしなかった、ところがスキュタイの女性はその逆で、外出もせずに家事に勤しんでいる、とアマゾンたちは断るのである。原文の二つの主語は非常に明瞭なコントラストに置かれている。スキュタイ女性が「あなた方の国のご

婦人」と表記されるのは当然だが、「私たち」に相当する語が敢えて代名詞 *he-meis* をもって表記され（これ自体かなり強調的である）、しかも二度繰り返されているのである。Hdt. はここでアマゾンたちの生活様式が、スキュタイのものとは、ひいては当時の女性一般のものとは、すこぶる異質であることを示そうとしたのであろう。しかし長いとは言えぬこのエピソードが示してくれるのは、ここまでである。これ以上は後代の資料に求めなければならない。

III

ヘレニズム以降の文献でアマゾンに言及したものは数多いが、その起源、国家、社会、習俗等について、包括的に伝えるものは限られている。これを時代順に挙げればディオドロス、ユスティヌス⁽²⁰⁾、ストラボン、であろう。いまはディオドロスにしたがって当時のアマゾン伝承を見てみよう。

彼女たちの国がテルモドン河畔にあるとされるのは（II 45.1）、ヘラクレス伝説と同様である。その崇拝する神はアレスとアルテミス（46.1）⁽²¹⁾、王権は女子による世襲（46.3）。他の社会とは逆に、女は競って戦さのための訓練をおこない、男は糸紡ぎなどをして女の隷属下にあるが、これは女王が定めた法による（45.2）。生まれた子が男なら腕も脚も切断して、戦闘などできないようにしてしまうが、もし女ならば成長したときに邪魔にならぬようにと右の乳房を焼いてしまう。このために彼女たちはアマゾンと呼ばれる（45.3）。この女王は有能な将軍でもあり、隣接部族を屈伏させて、テルモドン河口に都市テミスキュラを建造した（45.4）。彼女の娘はさらに優れて、女子に幼い頃から戦闘訓練をほどこし、タナイス川の彼岸に遠征、トラキアに至るまでのすべての民族を従えて帰国、さらにその版図を南方のアシア、シリアに広げる（46.1-2）。その死後、一族の女子が代々王権を継承してアマゾンの名声が高まると、ヘラクレスが女王ヒッポリュテの帯を取りに来る。彼が多くのアマゾンに殺して目的を遂げると、近隣部族は昔日の怨みとばかり絶えず攻めてきたため、アマゾン族の名前さえ消え去るほどであった（46.3-4）。ヘラクレスの侵攻後ほどなく、生き残りのアマゾン族の女王にしてアレス神の娘でもあるペンテシレイアは、親族殺害の罪で国を逃れ、戦争中のトロイアへ援軍として赴くが、アキレウスの手に掛かりみごとな最期を遂げる（46.5）。

以上がディオドロスの伝えるアマゾンである。ここでは男性を隷属下に置く“反男性的”アマゾン像が明らかに現われている。しかも興味深いことに、デ

ディオドロスはこの話を語り始める際に、「お話の類mythois homoiaと思われても」と前置きしており（Ⅱ44.3），さらにこの話の終結部でも，あたかも申し訳のように，以下の言葉を添えている：「ある人々が彼女たちの武勇について述べても，アマゾンたちに関する昔の物語mythousを世人は作り話peplasmaenousだと見做すのである。」（Ⅱ46.6）

ディオドロスはまた，リビュアに住むアマゾンについても報告している（Ⅲ52.1f.）．彼女たちはトロイア戦争よりも大分以前に滅んでしまったが，テルモドンのアマゾンはこの戦争直前が最盛期であったため，こちらの方が有名になってしまった．そして前者の名声を後者が受け継ぐことになった，とのことである（52.2）．

ディオドロスはディオニュシオス・スキュトブラキオンに拠りつつ（52.3），リビュアのアマゾンについてこう記述する：居住地は世界の端，リビュア西部のヘスペラと呼ばれる大きな島で，これはトリトニス沼沢地にある（53.4）．ここには果実のなる樹木がたっぷりとあり，家畜も多いが，穀類を用いることはない（53.5）．崇めるのはキュベレ女神（55.8）．国は女性が支配し，彼女たちは戦闘術の獲得に勤しみ，一定期間軍務に服すが，その間純潔を守る．期間が明けると子供を儲けるため男のもとへ赴く（53.1）．男は一日中家にいて妻の命令をはたすが，軍務にも国務にも携わることはない，生意気になって，女に対して謀反をおこさせないためである（53.2）．子供の養育は男の仕事．もし女子が生まれれば乳房が焼かれるが，これは成長後に戦さで邪魔にならぬようにとの配慮である（53.3）．

彼女たちは武勇にすぐれ，また戦に逸ってもいたので，まず島の諸都市を征服してから，女王ミュリナ（54.2）は軍勢を率いて遠征の途につく（53.6f.）．エジプト通過の際には王ホロスと親交を結び，アラビア人と戦い，シリアを征服する（55.4）．さらにアナトリアに進攻し，その内陸地方，イオニア・アイオリス地方を席捲後，入植して，都市に女王自身，その姉妹，指揮官たちに因んだ名前をつける（55.4-9）．しかし結局は亡命トラキア人モプソスと亡命スキュタイ人シピュロスの連合軍に破れ，ミュリナと多くの部下は戦死，残兵は帰国する（55.10）．そして彼女たちも，リビュアにやってきて，女の支配に苦しむ民族を見過ごしにはできないと考えたヘラクレスによって，滅ぼされた（55.3）．

ここにも女性が男性を支配する社会が描かれている．だがホロスとの協定には現実の政治・宗教状況との御都合主義的妥協が窺われるし，ヘラクレスによ

る部族根絶などは、明らかに伝統的な“功業”モチーフを粗っぽく採り入れたものと考えられる⁽²²⁾。また既存の社会から遠隔の地に住むという点でもテルモドン河畔のアマゾンと同様である。ところで彼女たちが「穀類を知らない」ことをどう解釈したらよいだろうか。古来これを、アマゾンという名称の語源と関連づけようとする試みがおこなわれている⁽²³⁾。しかし、果樹に溢れて、家畜に富むというそのユートピア的な国土は『オデュッセイア』に語られるキュクロプスたちの地を想起させる⁽²⁴⁾。これは、彼女たちが有能な女王のもとに剽悍な戦士集団を誇った部族を形成してはいても、ある意味でキュクロプス族同様、文明の恩恵に浴さぬ未開の民であったことを意味しよう。

IV

つぎにユスティヌスの伝えるアマゾン像を見る⁽²⁵⁾。抗争に破れたスキュタイ王家の若者二人が、多くの同胞を引き連れてテルモドン河畔に移住、テミスキュラ人を隷属させ、平原に定住。近隣部族からの掠奪をこととしていたが、罠に掛かって虐殺される(II 4.1-3)。残された妻たちは武器を取って国境防備にあたり、寡婦の身で国家を維持する(4.4-6)。のみか、仲間の間で嫉妬心が生ぜぬように、留守を守っている男たちを殺戮する(4.7)。夫たちの仇を討たんと近隣部族を破滅させるが、部族保存のためには彼らと性交渉をもつ(4.9)。男子が生まれれば殺し、女子の場合には自分たち同様、婦人の仕事をさせず、武術・馬術の鍛練をほどこすが、弓術の邪魔にならぬように右の乳房を幼児期に焼くので、アマゾンと呼ばれた(4.10-11)。二人の女王マルペシアとランベトは軍を二分して交互に国境警備、戦闘にあたる(4.12-13)。子孫の権威づけのため、自分たちはマルスの後裔だと吹聴し、ヨーロッパの大部分を屈伏させたのち、アジアの都市ほとんどを切り従え、エベソスをはじめとする諸都市を建設、軍の一部は戦利品を携えて帰国(4.14-15)。アジア残留部隊はマルペシアとともに異民族の攻撃を受けて殺され、シノペが後を継ぐ。その勇武と処女性がアマゾンの名を誉高きものとした結果、アマゾンの女王の帯の略取という不可能な仕事がヘラクレスに課せられた(4.16-18)。

ヘラクレスがギリシア勢を伴って王国に不意打ちをかけたとき、アンティオペとオリテュイアが女王であったが、後者は外地で戦争中(4.19-20)。予期せぬ英雄の襲撃を受けたアマゾンたちはあっけなく屈伏し、捕虜となった大勢の中にはアンティオペの姉妹メラニッペとヒッポリュテがいた。前者はヘラク

レスの、後者はテセウスの囚われの身となる(4.21-23)。テセウスがヒッポリュテを娶り、ヒッポリュトスを生ませたのに対し、ヘラクレスはメラニッペをアンティオペに返還し、その代償として帯を得る(4.24-25)。戦地から戻ったオリテュイアは復讐に向けて仲間を鼓舞し、さらにスキュタイ王に援軍を要請。だが戦闘直前に援軍との間に軋轢が生じて、見捨てられたアマゾン軍はアテナイ軍に破れ、帰国(4.26-30)。オリテュイアの後継女王ペンテシレイアは、トロイアに援軍に赴きギリシア勢相手に奮闘、その武勇を讃えられるが斃れて、麾下の軍も滅亡。王国を守っていた僅かな者たちも近隣諸族に対して辛うじて防御戦をおこなうありさま(4.31-32)。この部族はアレクサンドロスの時代まで命脈を保っており、大王の血筋を引く子を得ようと女王ミニュテュイアあるいはタレストリスは彼と13日間臥床を共にしたが、故国に戻るとはどなく全アマゾン族の名のもとに殺された(4.33)。

かなり詳細な記述である。出自をスキュタイとすること、マルス(アレス)の後裔と名乗ること、女性のみによる国家運営、子供の扱い、女子の鍛練、これらはおそらくアマゾンに関する伝統的モチーフに従ったものと思われる。ギリシアの英雄による“女王掠奪”“アマゾン攻め”のヴァージョンはプルタルコスが伝えるようにじつに多様であるが⁽²⁶⁾、“帯”の場合も、ヘラクレスが、A)捕らえたメラニッペと交換にヒッポリュテから入手した、あるいは、B)アマゾンたちとの戦いでヒッポリュテを殺して獲得した、さらに、C)捕らえたアンティオペをテセウスに与え、一方自分はメラニッペを解放して彼女から帯を得た、などの伝承がある⁽²⁷⁾。ユスティヌスの場合はA)とB)によるバリエーションで、格別新奇ではなく、伝統的なものと考えてよい。

古典期には見られない新しい要素としては、当然ながら、女王とアレクサンドロスとの出会いが挙げられる。このエピソードは古代では人口に膾炙したようで、多くの作家が伝えており⁽²⁸⁾、いわゆる“アレクサンドロス伝説”にも採り入れられてゆく⁽²⁹⁾。だがその信憑性については既に古代でも疑義が挟まれていた⁽³⁰⁾。しかし問題となるのは、その真偽よりも、このようなエピソードが語り継がれた背景である。不世出の軍事的天才と女戦士国の女王の出会いは、それだけですでに劇的だが⁽³¹⁾、さらに彼女が彼の子供を望むとあればロマンティックな話題となる。だがここで伝承が後世に伝えようとしたのは、むしろ英雄アレクサンドロスの子種を欲するアマゾンのメンタリティーであろう。女戦士は、アレクサンドロスほど魅力的な男性が相手でも⁽³²⁾、あくまで“戦士の”発想をするのである。

これが極端に現われているのが「互いに相手の方が恵まれているのではないかと思わぬように、家を守っている男たちを殺戮した」という記述である（4.7）⁽³³⁾。いわば戦士間の絆を堅固なものとするために、生き残っていた夫たちをその妻たちが殺したというのである。Hdt.は、アマゾンたちがスキュタイの言葉で“オイオルパタ”と呼ばれ、それは“男殺し”の意味だと述べ、この説明として、彼女たちが捕虜として護送された折に敵の男たちを船上で殺戮したエピソードを語っている（IV110.1）⁽³⁴⁾。ユスティヌスのアマゾンは、同胞、それも夫を殺すという点で、残虐な部族として描かれている。これは女人戦士国の習俗としては理解できるが、他の文献には見られぬネガティブな要素である。

V

彼女たちの男性に対するネガティブな観方はいつに遡るのであろうか。既にアイスキュロス『縛られたプロメテウス』723f.に、イオがカウカソスの向こうで「男を忌み嫌うアマゾンたちの軍勢」に出会うだろう、との表現が見られる。少なくともこの頃（上演は前5世紀後半）には反男性的、男性憎悪的なアマゾン像があったことは間違いない。

アマゾン像の変遷を考える際に看過できないのが、Hdt.IX巻の記述である。ここでアテナイ人は、きたるべき対ペルシア戦でアテナイは左翼を受け持つには値しないとのテゲア人の非難に反駁して、アッティカに侵入してきたアマゾンたちに対する先祖のみごとな事蹟を挙げる。だがこれは単にバルバロイの襲撃に対抗した経験を述べているだけではない。まず、a)エウリュステウスから遁れはしたものの、誰からも見離されたヘラクレイダイを引き取ったうえ、彼らのためにエウリュステウスを破ったこと（27.2）、つぎにはb)テバイ攻めで斃れたアルゴス人のためにテバイに兵を向けて遺体を収容し、エレウシスに埋葬したこと（27.3）が語られたのち、c)アマゾン撃退およびトロイア戦争での活躍について言及されている（27.4）。ここにはアテナイ人の武勇に裏打ちされた義侠心、愛国心が強調されている。

この例は古典期の他の作品にも見出されるが⁽³⁵⁾、ここではリュシアスの第Ⅱ番弁論『葬礼演説』を例に、その内容を見る。まず先祖の事蹟を述べると語り始め（1-3）、彼らはアマゾンを撃退（4-6）、テバイ攻めで斃れた英雄たちの亡骸を、テバイに出陣してまで取り戻し、埋葬した（7-10）。さらにヘラク

レイダイを庇護し、エウリュステウスの軍を打ち破った(11-16)。さまざまな点で、彼らには正義の戦いを闘ったのである(17)。順序は変わっても、上述のA)~C)の要素は揃っている。この弁論形式は、アテナイというポリス内の団結、あるいはギリシア全体が対外的な結束を訴えるときに、しばしば用いられたようである。ことに外敵に対する警鐘を鳴らすときには、バルバロイであるアマゾンの例は有効であったのかもしれない。ではその弁論の中で彼女たちはどう評価されているのだろうか。さらにリュシアスの例で続けよう。

テルモドン河畔に住むアマゾン族は、その辺りでは鉄器で武装した唯一の部族で、馬に乗ったのも彼女たちが最初であった。彼女たちは、性別では確かに女であるが、その武勇ゆえに男と見做されていた(4)。多くの民族を隷属させたのち、ギリシアの名声を聞いて、アテナイへ攻めてきたが、我が国の優れた勇士たちと相見えて、自分たちの精神はその女性という性に類したものであることに気づいた(5)。だが彼女たちは冒した過ちから学んで将来の糧とせず、故国へ戻れとの忠告を受入れず、討死した。その愚挙ゆえ、アテナイにとっては不朽の誉がもたらされ、彼女たちの国は滅亡した。不当によその国に食指を動かしたために、己れの国を失ったのは当然である(6)。

彼女たちが「最初に馬に乗った部族」とされているのは、伝統的アマゾン像である。「鉄器で武装した唯一の部族」も、やはり、恐怖を与える戦士集団にはふさわしい。問題は「冒した過ちから学んで将来の糧とせず」、なおも武力を恃んで他国を侵そうとした点である。これはまさに応報に値する愚挙anoiaで、傲慢さに通じる。このような行為は、平和を求める市民には“バルバロイ”と映じたに違いない⁽³⁶⁾。

結びにかえて

このような弁論を生み出した社会背景を考慮する必要がある。ペルシア、スパルタ、さらにマケドニアの脅威を受け続けていた当時のアテナイでは、国家と民主主義を守るために、その基盤である真の自由が切望されていた。アスパシアもその“葬礼演説”の中で「自由を守るためならば、ギリシア人を相手にギリシア人のために戦うことも、バルバロイを相手にギリシア人のすべてのために戦うことも必要だと、私たちの先祖は考えていました」と訴えている⁽³⁷⁾。

いかなる外部勢力からも独立しようとするとき、外敵撃退に成功した過去の事例を引合いに出す方法は効果的である。そこでは自分たちの先祖の正義と外

敵の不義が強調されなければならない。ところがたまたま女性だけの国家・軍団をもつと言われる部族がおり⁽³⁸⁾、ギリシアの英雄がその地に赴き、女王の帯を略取し、また女王を連れ還ったために彼女たちがギリシアに侵攻してきた、という伝承があった。女戦士集団にすぎなかったアマゾンたちが、古典期の政治的な色彩の強い文献を中心としてネガティブなニュアンスを帯びてきた背景として、当時の社会情勢の変化を斟酌すべき所以である。この時期にさまざまなヴァージョンで、“反男性的”のようなネガティブな要素も含めて、一般に流布している基本的な“アマゾン像”が確立したものと思われる。以後、ギリシア人の地理上の知識が遠方に広がるにつれて、彼女たちの居住地がギリシアからますます遠のくというほほえましい現象も生じ⁽³⁹⁾、或いはアレクサンドロスとの出会いのようなエピソードが付加されていったのであろう。

注

- (1) e.g. Il. 6.186f., Pind. Ol. 13.87f., Apollod. 2.3.2.
- (2) e.g. Il. 3.185f., Philostr. Her. 20.41, 但しピロストラトスのテキストは未見。
- (3) e.g. Apollon. Rhod. 2.966f., Eur. Herc. 408f., Apollod. 2.5.9, Philochoros F110=Plut. Thes. 26, Diod. 4.16.1f. 以下ギリシア歴史家断片は, Jacoby, Die Fragmente der griechischen Historiker, Leiden, 1957f. による。
- (4) e.g. Pind. F175, cf. F174, F176. (断片は Snell-Maehler の Teubner 版による。) Apollod. E. 5.2, Pherekydes F151=Hellanikos F166=Herodoros F26=Plut. Thes. 26.
- (5) e.g. Procl. 2, Quint. Smyr. I, Apollod. E. 5.1. プロクロスは Allen の OCT 版による。
- (6) 例えば Fennel, Pindar: The Olympian and Pythian Odes, 1893, Cambridge は, Ol. XII 16 に見られる用例 "(stasis) antianeira" を " 'waging war on men' according to Epic usage" として, "Faction (i.e. stasis) is personified as an Amazon hostile to the manhood of a state" と見る。
- (7) Schol. b (BCE³E⁴), A ad Il. 3.189. なお古注は Scholia Graeca in Homeri Iliadem, rec. H. Erbse, 1969~1988, Berlin による。

(8) cf.Suda,s.v.Homeros, cf.Schwenn,s.v.Penthesileia,RE,Suppl.7, なおBethe,Der troische Epenkreis,1966,Darmstadt(=Homer,Dichtung und Sage, 2.B.2.T.4.B.,1929,Leipzig u.Berlin),20(=168)はAithiopsisもAmazoniaも『小イリアス』の部分の名称であったとする。

(9) Il.Schol.T ad 24.804は現存のテキスト最終部「そのように彼らは馬を馴らすヘクトルの葬儀をとり行っていた」とは別のテキストの存在を伝える, 「そのように彼らはヘクトルの葬儀をとり行っていた.すると勇士を／倒す雄々しいアレスの娘,アマゾンがやってきた.」この箇所の訳文は,岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』,1988年,創文社,249による。

(10) この部分については,岡,前掲書,250以下,から多くの示唆を受けた。

(11) e.g.Pind.F.172.5, Apollod.2.5.9, Eur.Herc.415, Diod.2.46.3.

(12) Strab.12.8.6, cf.Eustath.ad Il.2.814.

(13) Il.6.492, cf,Il.20.137, Od.1.358,11.352,21.352.

(14) Henderson,Aristophanes:Lysistrata,1987,Oxford,xli.また“女性器”のconnotationについては, ibid.174.

(15) Henderson,op.cit.xlf.

(16) -rr- < -rj- のassimilationについては以下を参照:Schwyzer,Griechische Grammatik,Bd.1,Muenchen,1968,323., Rix,Historische Grammatik des Griechischen,Darmstadt,1976,61.

(17) 無論その起源がアマゾンと関連づけられたわけであるが,その伝承がいつ頃まで遡るか不明である. Eustath.loc.cit.,Strab.13.3.6.なおディオドロスはミュシア(3.55.6.) およびリュビアの同名の都市(3.54.5.)がアマゾンの女王に囚んだものであることを伝える。

(18) アマゾネスとヘラクレスの関係,またテセウスとの関係については,ヘラクレスがテセウスのVorbildとなった,と考えるのが普通である.さらにテセウスのテミスキュラ行は,彼が掠奪してきた女王の名称が様々であることなどから,ペイシストラトスの時代になって創作されたと見る研究者もいる. cf.Herter,s.v.Theseus,RE,Suppl.13,1149f.

(19) Floryはこのエピソードにおけるアマゾンをnoble savageと見る. Hdt.の作品では,大概prosperous aggressorsは贈物で相手の歓心をかおうとするが(キュロス;1.205,カンビュセス;3.21.), noble savageは通常このような贈物を拒絶する,と. The Archaic Smile of Herodotus,1987,Detroit,109f.

(20) Iustinus自身の時代は全く不明だが,ここで用いる彼の書は,帝政期

の歴史家Trogusのepitomeである。

(21) 普通彼女たちの父はアレス (e.g.Schol.T ad Il.3.189) ,部族神はアルテミス。

(22) 注(39)およびその本文該当部を参照。

(23) e.g.Schol.b(BCE³E⁴)T ad Il.3.189「maza (穀類を捏ねたもの) を食べないため (アマゾンと呼ばれた)」。

(24) Od.9.106f., Hdt.4.19, Eur.Cycl.332f.cf.Ferguson,Utopias of the Classical World,1975,London,123f.

(25) 使用したテキストは, M.Iuniani Iustini Epitoma Historiarum Philippicarum Pompei Trogi,rec.F.Ruehl,1915,Leipzig

(26) Plut.Thes.26, cf.Apollod.E.1.16.

(27) A)Apollon.Rhod.2.966f., B)Apollod.2.5.9, C)Diod.4.16.1-4.

(28) Diod.17.77.1f., Plut.Alex.46, Curt.6.5.24f., Arrian.7.13.2f., またIust.12.3.5f.でも繰り返されている。

(29) 例えばPseudo-Callisthenesのエチオピア版と称するものには, アマゾンの女王がアレクサンドロスに送った書簡 (彼に服従して, 彼のもとに赴き, 貢物をしたい旨の) が収録され, 彼はその地を訪れた, と書かれている。Budge (tr.),The Alexander Book in Ethiopia,1933,London,128. 同じくアルメニア版にもアマゾンの女王がアレクサンドロスに送った書簡 (自分たちの国を訪問するよう頼み, 贈物をした上に100人の騎士を一年間差し出すとの), およびその地の様子を母オリュンピアスに報じる彼の書簡が収められている。Wolohojian(tr.),The Romance of Alexander the Great by Pseudo-Callisthenes, 1969,New York/London,143,145.

(30) 例えばPlut.Alex.46.はこの出来事を肯定する5人, 否定する12人の名を挙げ, Strab.11.5.4.は, この出来事の真実性は認められていない, とする。

(31) Diod.17.77.1.は, 女王タレストリスは美貌・肉体とも際立っていた, と, アレクサンドロスについては次注参照。

(32) Plut.Alex.4f.

(33) 2.4.7: Et ne feliciores aliae aliis viderentur,viros,qui domi remanserent,interficiunt.

(34) 110.1.エピソード冒頭部の原文はhote「ギリシア人がアマゾンたちと戦ったとき」と始まり, toteで受けて, 物語に入るという構造をとり, “オイオルパタ” の語源説明は挿入文となっている (OCTでは()内に入れられてい

る)。だがHdt.がアマゾネスという語を用いてすぐに、このエピソードとオイオルパタの語源との関連を意識したことはコンテクストから了解されよう。なおHow & Wells, *A Commentary on Herodotus*, vol.1, 1928, London, ad loc.はゼンド語との関係から "masters of men" と見るが, Elderkin, OITOSYROS AND OI-ORPATA, *AJP* 56(1935), 342-6はLat.vir, Gk.peo, paioと関連させて "man-smiter, man-killer" とする。

(35) Lys.2.4-16, Isoc.4.54-70, 12.193-196, Platon, *Menex.*239a-b, Dem.60.7-8. アマゾンの例が言及されないものとしてIsoc.12.168f.がある。

(36) Isoc.12.196は、アッティカへの侵略者(アルゴス人エウリュステウスの例外はあるものの、トラキアのエウモルポスの軍、アマゾンたち、ダレイオス)の行為を "hybris" と呼ぶ。

(37) Platon, *Menex.*239a.

(38) Bisset, *Who were the Amazons ?*, *Greece & Rome*, 1971, 150-51 は、アマゾン族は神話・伝承ならぬ、ギリシア人が出会った無髭、小柄で弓術・馬術にたけた現実の民族とする。また世界各地に存在した現実の女性戦士集団については、大林太良『神話の系譜』1991, 東京, 講談社学術文庫, 44-51を参照。

(39) e.g. Strab.11.5.4. cf. Graef, s.v. *Amazones*, *RE*, Bd. I, 1755f.